

〈原著論文〉

ハンドボール競技における サイドシュート動作指導に関する質的研究の一例

— 国内一流指導者の語りを手がかりに —

平子大喜* 船木浩斗** 渡邊丈真**

A case qualitative study of movement know-how for side-shoot in handball
— Clue from narratives of an outstanding Japanese handball coach —

Hiroki HIRAKO *, Hiroto FUNAKI ** and Takemasa WATANABE **

Abstract

The purpose of this study is to clarify what is the movement know-how of the side-shoot by an outstanding Japanese handball coach.

An outstanding Japanese handball coach was interviewed. The interview was followed by these procedures. 1.The subject was asked who was the best side-player in Japan. 2.The present interview was not structured systematically. 3.Those movement know-hows were summarized in five slogans and the video image.

Aspects in side-shoot were divided in “Preparation”, “Running start” and “Shooting”. The movement know-how of the side-shoot was summarized in five slogans, that is, “Move before catching!”, “Jump high upwards!”, “Stabilize your trunk after jump!”, “Bring your elbow above your shoulders at your highest jump point!”, “Bring your elbow in front!”.

In conclusion, our five slogans about the movement know-how of the side-shoot may be very useful for on-site coaching for handball players.

I. 緒言

ハンドボールはヨーロッパで盛んに行われている球技種目の1つである。ここ10～15年の間にハンドボールの試合展開は非常に速くなり、1試合の攻撃回数は1990年代と比べると倍近く増え、1試合の平均チーム得点は15点程度から30点前後にまで増加してきた¹⁾。そのような速い試合展開に順応し、なおかつ質の高いプレーをするために、一流と呼ばれる選手

にはより高い身体能力が求められるようになった²⁾。Pantelis, Jorgenらは、ギリシャのプロリーグの上位チームに所属する選手と下位チームに所属する選手の身体能力を比較し、垂直跳びにおいて上位チームの選手が優位に高値を示したと報告している³⁾。また、長谷川は、大学女子トップレベルのチームの主力選手と控え選手の身体能力を比較し、25m×2方向変換走、立ち5段跳びやハンドボール投げにおいて主力選手の方が高い数値を示した⁴⁾ことから、一

*中京大学大学院体育学研究科, **中京大学スポーツ科学部

流の選手にはこれらの高い身体能力が必要であると考えられる。

サイドシュートとは、コーナー^{注1)}から走り込み、ゴールエリアラインの中に飛び込んで打つシュートである。その特徴としては(1)シュートコースが限られていること、(2)シューターとゴールキーパーが1対1の状態であること、(3)ディフェンス側の選手と対峙した状態で打つロングシュートやミドルシュートに比べて、シュート成功率が高いことが挙げられる。試合においてサイドシュートを決めることは、相手ディフェンスに対してプレッシャーを与え、チームを勝利に近づけることができるため⁵⁾、試合の最終的な結果に大きく影響を与える⁶⁾。近年のオフense戦術はポジションチェンジが多用される傾向にあるため⁷⁾、どの選手でもサイドシュートを打つ可能性があり、各選手におけるサイドシュートの成功率を上げることが大きな課題となっていると考えられる。

ハンドボール競技におけるサイドシュートは、個人戦術に位置づけられる。近年のハンドボールにおける選手育成システムを概観すると、国内外を問わず、個人戦術力が強調されており⁸⁾、このことは、サイドシュートの現場における指導の重要性を示している。

しかし、一般に球技種目の指導は「チームーグループー個人」の各レベルにおいて多様な課題が同時多発的に生じるなかで展開されるため、困難な活動である⁹⁾。また、効果的な指導の方法の1つとして、一流の選手の持つ主観的な情報を用いることが有効であるという報告がある¹⁰⁾。

スポーツ選手の持つ主観的な情報は、スポーツ指導の場面においては、「動きのコツ」と呼ばれる¹¹⁾。會田・船木は、一流の選手が実践から身に付けた「動きのコツ」をインタビュー調査による質的研究を用いてハンドボール競技の指導に活かそうとしてきたが、実際に現場で指導を行うのは監督やコーチである。指導者が対象としている競技者に獲得してもらいたい「動きのコツ」は、一流の競技者の持つ「動き

のコツ」とは微妙に異なるものなのではないかと考えた。つまり、指導現場で有益な情報とは、一流の指導者が競技者に獲得してもらいたい「動きのコツ」なのではないかと考えた。

したがって、本研究の目的は、国内一流指導者のサイドシュート動作指導における「動きのコツ」とは何かを明らかにすることとした。

II. 対象・方法

1. 対象者

対象者は村上修氏である。これは、村上氏が2006年から現在までC大学でハンドボール競技の指導をしており、2013年の全日本インカレにおいて男子チームを準優勝、女子チームをベスト4へ導くなど数多の指導実績をもつ指導者であり、選手に獲得してもらいたい「動きのコツ」を、語りによって提示できると本研究者が判断し協力を依頼したものである。表1に村上氏の指導経歴の概要を示した。村上氏には本研究の趣旨や調査方法について十分に説明し、研究の成果を実名で公開することの了解を得た。

表1 本研究の対象者の指導プロフィール

氏名：村上 修 氏
主な戦績：港明中学校 全国大会出場 (1993)
C大学体育会男子ハンドボール部 全日本インカレ準優勝 (2013)
C大学体育会女子ハンドボール部 全日本インカレ第3位 (2013)
指導経歴：村上氏は1991年から名古屋市立港明中学校で本格的にハンドボールの指導を始めた。その後日本の実業団チーム、トヨタ車体のコーチ兼アドバイザーに就任し、当時2部であったチームを1部へ昇格させた。2006年から現在までC大学体育会ハンドボール部男子・女子チームの外部コーチを務めており、2013年の全日本インカレでは各カテゴリーでの豊富な指導経験を活かし、男子チームを準優勝、女子チームを第3位に導いた。

2. 方法

本研究では、対象者のサイドシュート動作指導における「動きのコツ」を明らかにするために、インタビュー調査を用いた質的研究の手順を採用した。今回の研究におけるインタビュー調査は、語り手と聞き手が1対1の非構造化面接法を用いて行った。インタビューの語り手は

対象者であり、聞き手は本研究の筆頭執筆者が務めた。この聞き手は、選手および指導者として10年間ハンドボールに携わっており、語り手の発言の内容を十分理解する能力を持っていた。インタビューの場において、聞き手は、語り手の語りに対して先入観を持たずに共感する態度で、語り手に対して敬意をもって臨んだ。調査は2015年9月4日に、語り手と聞き手が1対1で落ち着いて会話ができるC大学の一室において、1時間程度で行った。また、すべての発言は対象者の理解を得たうえでICレコーダーを用いて録音した。

インタビュー調査の手順を以下に示す。

- ①語り手に対して研究の意義や目的についての説明を行い、参加の同意を得る。
 - ②語り手の認める一流のサイド選手を事前に聞き取る。
 - ③②で名前の挙がった選手の試合におけるサイドシュート場面を切り取ったビデオ映像を作成する。
 - ④インタビュー調査を行う。
 - ④-1 語り手のサイドシュート動作指導における「動きのコツ」を自由に語ってもらい、聞き手が疑問に思った内容について随時質問をしていく。
 - ④-2 ③で作成したビデオ映像を見ながら、④-1で聞き取ったサイドシュート動作指導における「動きのコツ」の場面を確認する。
 - ⑤語り手の発言をもとに、サイドシュート動作時の「動きのコツ」を局面ごとにまとめる。「動きのコツ」に加えて、「試合前に行うべきこと」についても同時にまとめる。
 - ⑥⑤で明らかになった「動きのコツ」を抽出し、③のビデオ映像にテキストとして書き加える編集を行う。
 - ⑦⑥で作成したビデオ映像を語り手に示し、語り手のサイドシュート動作指導における「動きのコツ」に関する発言の趣旨を十分に反映しているかを確認する。
- 今回のビデオ映像は、手順②の聞き取りより、日本ハンドボールリーグのチーム、豊田合

成ブルーファルコンに所属する出村直嗣氏をビデオ映像の対象とした。出村氏の競技歴の概要を表2に示した。出村氏には本研究の趣旨や調査方法について十分に説明し、研究の成果を実名で公開することの了解を得た。ビデオ映像は、出村選手の試合でのサイドシュートを切り取り、通常の再生速度の映像とその1/2の再生速度の映像が連続して流れるように編集した。今回はインタビュー調査の時間的な制限により、筆者がシュート映像を鑑賞し、跳び込み方、タイミング、腕の使い方に変化を加えていると感じた9本のシュートを選出した。また、手順④-2のインタビュー調査においては、対象者が動きの説明をしているときには映像を止め、必要な場合には巻き戻して再生した。

表2 ビデオ映像の対象者の競技プロフィール

氏名	出村直嗣 氏
主な戦績	全日本インカレ 準優勝 (2009) 全日本社会人ハンドボール選手権 第3位 (2013)
タイトル	日本ハンドボールリーグ得点ランキング 第9位 (2013-2014)
競技歴	出村氏は中学生からハンドボールを始め、高志高校、筑波大学でキャリアを積んだ。筑波大学時代には高いサイドシュート決定率で全日本インカレ準優勝に貢献した。卒業後デンマークに渡り、ブレナスレフ、ヴロ・パーグラム IF、ヴィボーHKで活躍した後、帰国し現在豊田合成ブルーファルコンに所属している。2016年の国際大会には日本代表として選出されている。

III. 結果

村上氏の考えるサイドシュートの局面は、「準備」、「助走（踏み切り）」、「シュート」の3つであることが判明した。それぞれの局面の説明と、各局面の指導で意識すべき「動きのコツ」や「試合前に行うこと」については以下の通りであった。

1. 「準備」の局面

この局面は、選手がボールを保持していない状態で、静止してパスを待ち構えている場面を示す。村上氏はこの局面における「動きのコツ」として、パスを待ち構えている段階においてゴールキーパーがどのような位置取りをしているのかを観察することを挙げた。また、選手

が相手のゴールキーパーの動きの特徴を理解しておくことや、パスが出すパスの特徴を理解しておくことも、試合前に行うべきこととして、この局面に含まれると述べていた。前後半合わせて60分間の試合の中でゴールキーパーの動きの特徴を見抜くことは困難であるため、それらを事前に確認しておくことが重要であると考えられる。また、普段の練習において、パスとコミュニケーションをとり、跳び込みに入りやすい状況を作っておくことも重要であると考えられる。

2. 「助走（踏み切り）」の局面

この局面は、選手がボールを保持する前に動きはじめてから、ボールを保持して走り込み、踏み切るまでを示す。村上氏はこの局面における「動きのコツ」として、パスに合わせてスピードのある走り込みをすること、ディフェンスとの距離を保った位置で踏み切ること、真上に向かって踏み切ることなどを挙げた。サイドシュートの場面では、相手チームのサイドディフェンスがシューターをよりコーナーに近いところで踏み切らせようと、シューターに対して向かってくることが予想される。そのような状態においてもパスに合わせてスピードのある走り込みをすることで、十分な角度（シュートコースの範囲）を確保することができると考えられる。しかし、向かってくるディフェンスに接触されると、次の「シュート」の局面に悪影響を及ぼす可能性があるため、ディフェンスに接触しない距離を保ちながら踏み切ることも重要であると考えられる。村上氏は、多くの指導者がサイドシュート動作指導において、コーナーから7mライン^{注2)}に向かって「斜め方向」に跳ぶように指示をするが、そればかりを意識すると踏み切った後に自ら体勢を崩してしまうため、サイドシュートの成功率が低くなる可能性がある^{注2)}と指摘していた。一方で、「真上に向かって」力強く踏み切ると、「シュート」の局面でゴールキーパーの動きに対応できる体勢を確保することができるため、「斜め方向」に踏み切ることと比べてサイドシュートの成功率を

上げることにつながると述べていた。

3. 「シュート」の局面

この局面は、踏み切ってからシュートを打ち、着地するまでを示す。村上氏はこの局面における「動きのコツ」として、空中でゴールキーパーを観察する時間を作ることで、ボールを保持している側の肘を肩よりも前で、リラックスした状態で肩の高さに位置すること、ジャンプの最高到達点でボールを最も高い位置にすること、ジャンプをしてからボールをリリースするまでに肘の位置に変化をつけること、状況に合わせたシュートを選択しキーパーのタイミングをずらすことを挙げた。また、村上氏は、この局面において必要な要素として「高さ」、「方向」、「タイミング」の3つがあり、これらの3つの要素を用いるためには、体幹を安定させる能力が必要であるとしていた。

まず、「高さ」とは、シュート時のジャンプ高のことを表している。村上氏は、この部分を最も重要な要素と考えており、シュートコースの範囲を広げることよりも、相手ゴールキーパーの動きを観察し、シュートコースを判断するための時間を稼ぐことの方が重要であるとしていた。

次に、「方向」とは、ボールを保持している側の肘（※以下「肘」はすべてこちら側の肘とする）や手首を使って角度を取りに行く動きのことを表している。村上氏は、ここで重要となるのは、肘や手首の使い方とボールを保持する位置であると述べていた。村上氏の説明によると、ゴールキーパーは、シューターの腕の位置を見ることによってシュートコースを予測するため、空中での肘の位置が一定である場合には、シュートを止められる可能性が高くなる。したがって、シュートコースをゴールキーパーに悟られないためには、肘の位置に変化をつけることやボールをリリースする瞬間に手首を使ってシュートコースを変更する必要があり、また、ボールをジャンプの最高到達点で高い位置に保持してから肩よりも前に肘を持っていくことで、その変化がつけやすくなると述べてい

た。

最後に、「タイミング」とは、状況に合わせたシュートを選択し、キーパーのタイミングをずらすことを表している。村上氏は、これもシュートコースをゴールキーパーに悟られないための方法の1つであり、ループシュート^{注3)}やクイックシュート^{注4)}、逆スピンシュート^{注5)}などのさまざまなシュート技術を、ゴールキーパーの位置取りや踏み切った時のシュートコースの範囲といった状況に合わせて使い分けることで、毎回タイミングに変化をつけたシュートを打つことが必要であると述べていた。

村上氏は、この3つの要素のうち、どれか1つにでも毎回変化をつけることが出来れば、サイドシュートの成功率を上げることができると述べていた。つまり、常にこの3つの要素すべてが同じシュート（毎回ボールを保持した高さから同じ高さへ、同じコースに、同じタイミングで打つシュート）の場合は、キーパーに止められる可能性が高くなるということである。村上氏の持つ「動きのコツ」や「試合前に行うべきこと」を表3にまとめた。また、インタビューの際に村上氏が図示したサイドシュートの構造図を図1に示した。

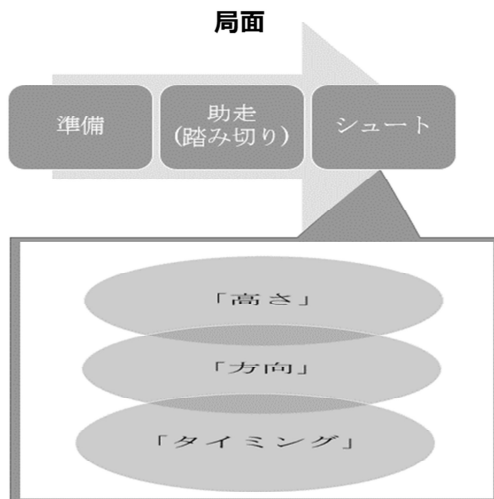


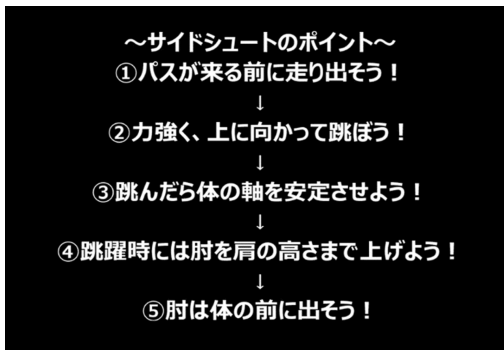
図1 インタビュー手順④-1で村上氏が描いたサイドシュートの構造図

出村氏のサイドシュート動作を見た村上氏は、①踏み切る前にゴールキーパーを確認している、②パスに合わせてスムーズな走り込みをしている、③上方向に向かって力強く踏み切れている、④踏み切り後、体の軸がまっすぐ安定している、⑤ジャンプの最高到達点で肘が肩の高さまで上がっている、⑥肘が体の前方に出た

表3 村上氏の考えるサイドシュートの「動きのコツ」や「試合前に行うこと」

<p>①準備 ※試合前に行うこと</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールを持つ前にゴールキーパーの立ち位置を確認しておく ※相手ゴールキーパーの動きの特徴を理解しておく ※パスのパスの特徴を理解する
<p>②助走 (踏み切り)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パスに合わせてスピードのある走り込みをする ・ディフェンスとの距離を保った位置で踏み切る ・真上に向かって踏み切る
<p>③シュート</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・体幹を安定させる ・ゴールキーパーを確認する時間を稼ぐ【高さ】 ・ジャンプの最高到達点でボールを最も高い位置に保持する【方向1】 ・肘を肩の前に出し、リラックスして肩の高さに持っていく【方向2】 ・着地するまでに肘の位置や手首の動きに変化をつける【方向3】 ・さまざまなシュート技術を駆使してゴールキーパーのタイミングをずらす【タイミング】

状態で手首が使えている, ⑦ゴールキーパーの位置などからの確かなシュート選択ができていくという7つの「動きのコツ」を挙げた. そこから, 手順⑦により, 「動きのコツ」を「パスが来る前に走り出そう!」, 「上に向かって力強く跳ぼう!」, 「跳んだら体の軸を安定させよう!」, 「跳躍時には肘を肩の高さまで上げよう!」, 「肘は体の前に出そう!」という5つの見出しを作成し, テキストとしてビデオ映像の中に書き加えた. ビデオ映像の例を図2に示す.



IV. 考察

近年, ハンドボール競技は, 試合展開が急速に変化しており, 選手にはより高いレベルの個人戦術力が求められるようになった. それに伴って, 指導の方法も刻々と変化してきた. 現在日本で出版されているハンドボール競技の指導書は, 1990年代の動作説明のみであった内容¹²⁾と比べて, 動作説明に加えて国内一流選手・指導者の解説が動作説明と並べて書き込まれている^{5,13)}. このことは, 會田・船木らの指導現場における「動きのコツ」の有用性を支持するものであるが, これらの解説は本研究のような質的研究の手順を踏んでいないため, 客観



図2 ビデオ映像の例

的な信頼性は必ずしも高くはないと考える。本研究では、インタビュー調査を用いた質的研究の手順を踏み、国内一流指導者を対象として「動きのコツ」を収集し、その内容を分析した。このような質的研究成果は、実際の現場の指導者にとってより効果的な指導を行うために信頼できる客観的情報であると考えられる。

ヨーロッパを代表する指導者であるハンガリーのPeter Kovacs氏はサイドシュート動作指導の「動きのコツ」として、「ゴールキーパーの正面に入らないこと」、「ゴールキーパーに近づかない—距離を保つ—こと」、「常にボールを高い所で保持すること」を挙げている⁶⁾。今回の研究において整理した、村上氏のサイドシュート動作指導における「動きのコツ」の中にも似たような内容が含まれていた。特に、「上に跳ぶ」という「動きのコツ」に関しては非常に近い内容であった。一方で、Kovacs氏は「ボールをゴールキーパーから見えないうに隠すこと」もシュートを決めるために重要な要素であるとしているのに対し、村上氏は、「肘の位置に変化をつけるために肘を体の前方に出すこと」が重要であるとしていた。肘を体の前方に出すということはボールをゴールキーパーに見せることになるため、一見するとKovacs氏とは真逆のことを述べているかのようと思われる。しかし、この部分における両者の「動きのコツ」のねらいは「ゴールキーパーにシュートコースを悟られないようにする」という共通のものであり、Kovacs氏はボールの出どころをゴールキーパーから見えないうにすることで、村上氏は空中で肘の位置を変化させることによってそれを達成しようとしているのである。つまり、同じ目標に対する方法論の違いであり、一概にどちらが正しいかを判断することはできない。そのため、このような質的研究を異なる対象者に対して継続的に行い、多くの「動きのコツ」を収集することは、現場指導者の指導の種類（レポートリー）を増やすことにつながり、結果的に指導の質を向上させる可能性がある。

Kovacs氏と村上氏の「動きのコツ」の差異

を生んだ要因の1つとして、海外と日本のゴールキーパーの体格差を考える。Visnapuuらは、ゴールキーパーの身長がサイドシュートの阻止率に影響を与えていることを示唆している¹⁴⁾。実際、2016年リオオリンピックで準優勝したフランス代表チームに登録されている3人のゴールキーパーの身長の平均値が193.0cmである¹⁵⁾のに対して、2016年日本のA代表に登録されている3人のゴールキーパーの身長の平均値は184.7cmであり¹⁶⁾、8.3cmの差がある。そのため、日本と海外でサイドシュートの動作指導における「動きのコツ」に若干の差異が生じた可能性がある。また、もう1つの要因として、2名の指導者が対象とする選手の競技レベル（カテゴリー）が全く違うということを考える。Kovacs氏はヨーロッパのプロリーグを指導している。このリーグに所属する選手は世界でもトップクラスの身体能力を有していると考えられ、難しい動作も容易にできると予想される。「ボールをゴールキーパーから見えないうに隠すこと」は、ボールをリリースするまでにより多くの時間と正確にコースを狙ってボールをリリースするための身体能力と技術が必要であり、肘の動きに変化をつけることが難しいといえる。一方、村上氏は、表1で紹介したように中学生から大学生、実業団選手にいたるまで幅広いカテゴリーの選手に対して指導を行ってきた実績をもつ。特に中学生は身体機能がまだ成熟しきっておらず、Kovacs氏の考える「動きのコツ」を体現するのは難しい。村上氏の「肘を体の前方に出すこと」は、肘の位置に変化をつけやすく、身体能力や技術の未熟な中学生でもシュートの成功率を上げる可能性がある。このことから、「動きのコツ」とは万人に共通するものではなく、指導の対象となる選手の競技レベル（カテゴリー）に適していなければ意味をなさないとも考えられる。つまり、様々なカテゴリーで指導を行う指導者に対してこのような質的研究を行い、各競技レベル（カテゴリー）別で「動きのコツ」をまとめる必要性が示唆された。

しかし、今回考察したのは、ヨーロッパと日

本で1名ずつの研究成果であり、世界あるいは日本国内の指導者全般のサイドシュート動作指導における「動きのコツ」と言い切ることにはできない。また、両者に対して同じ方法を用いた調査を行ったわけではないため、得られた「動きのコツ」が同等の質である確証はない。今後、指導者間で共通する「動きのコツ」を整理することができれば、サイドシュート動作指導のゴールドスタンダードやガイドラインとして提案できる可能性がある。そのような観点からも、今回のようなインタビュー調査を用いた質的研究成果を蓄積する大きな意義があると考えられる。

今回の研究では、「動きのコツ」を確認するツールとして、ビデオ教材を用いた。ビデオ映像は運動を繰り返し見ることができ、目標となる運動の「理想像の確認」をより正確にできるという特徴がある¹⁷⁾ため、今回のような質的研究に非常に役立つツールと考え採用した。また、最終的に完成したビデオ映像は教材としての価値が高く、今後、このような教材を活用した指導法の効果についての研究課題が解明される必要がある。

V. 結論

本研究により、「パスが来る前に走り出そう!」、「上に向かって力強く跳ぼう!」、「跳んだら体の軸を安定させよう!」、「跳躍時には肘を肩の高さまで上げよう!」、「肘は体の前に出そう!」という5つの「動きのコツ」が明らかとなった。また、本研究で採用した研究手順によって作成されたビデオ映像は、ハンドボール競技の指導現場において非常に有益な客観的情報となる可能性を示した。

VI. 謝辞

本研究の実施に際し、調査への協力を快諾し、面接調査への対応およびビデオ映像の確認をしていただいた村上修氏に心より感謝の意を表します。

注

- 1) サイドラインとアウトターゴールラインの交点を示す。
- 2) ゴールエリアラインとフリースローラインの間にあるゴール正面にひかれた1mの幅の線のことを示す。
- 3) ゴールキーパーの頭上を越えるようにボールを浮かせて打つシュートを示す。
- 4) ジャンプをしてから最高到達点に到達する前に打つシュートを示す。
- 5) ボールを持っている腕を下から前に持っていく途中で、前腕を一気に回内させてボールに回転をかけてリリースし、ゴールキーパーの届かない地点にバウンドさせ、バウンド後にボールがゴールに向かうようにスピンのさせるシュートを示す。

引用・参考文献

- 1) 笹倉清則, 徳永さつき, 三輪和義, 村松誠, 會田 宏, 藤本由喜子. Tactics of Handball in The World The Textbook for the Coach. 攻撃回数ならびに攻撃成功率は、大会毎に高くなっている。笹倉清則編. 315-317, (株)文伸. 2003
- 2) Mark Schmetz. Modernization of the Pre-game Warm-up. EHF master coach thesis. 359-381, 2014
- 3) Pantelis T. Nikolaidis, Jorgen Ingebrigtsen. Physical and Physiological Characteristics of Elite Male Handball Players from Teams with a Different Ranking. Journal of Human Kinetics. 38: 91-98, 2013
- 4) 長谷川千紗. トップレベルの大学女性ハンドボール部におけるポジション別の体力特性. 筑波大学修士論文. 2010
- 5) スポーツイベント・ハンドボール編集部. ハンドボールスキルアップシリーズ目からウロコのシュート術. サイドシュートとは?. 66. グローバル教育出版. 2014

- 6) Peter Kovacs. Shots from 6 meters fast break pivot/wing shots and break through shots duel between the goalkeeper and the attacker. EHF Lecturer. 2008
- 7) Talant Dushecaev. Spain's game philosophy in defense. IHF シンポジウム. 2012. https://www.youtube.com/watch?v=6HO_Fy63DWw
- 8) 會田 宏. 球技の個人戦術における実践知の構造に関する研究—ハンドボールの事例を中心にして—. (2) 個人戦術における技術の役割. 2. 筑波大学博士論文. 2011
- 9) 廣瀬勝弘, 黒原貴仁, 梶山俊仁. 球技学習における課題設定過程に関する実践研究—ラグビーフットボールにおける防御技術の指導を対象として—. 体育授業における球技学習の困難性. 53-63. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要. 2007
- 10) 船木浩斗, 會田 宏. ハンドボールにおける1対1の突破阻止に関する動きのコツ: 卓越した防御プレイヤーの語りを手がかりに. ハンドボールリサーチ. 3:1-8. 2014
- 11) 會田 宏. 卓越したセンタープレイヤーにおける1:1の突破に関する動きのコツ. ハンドボールリサーチ. 1:17-23. 2012
- 12) 日本ハンドボール協会. ハンドボール指導教本—地域・競技力向上指導者C級用. (3) ジャンプシュート[サイドシュートの場合]. 72-74. 大修館書店. 1992
- 13) 酒巻清治. 基本が身につくハンドボール練習メニュー200. サイドシュート. 128-135. 池田書店. 2012
- 14) Visnapuu M, Jurimae T, Jurimae J and Allikivi P. Relationship between high level young handball goalkeepers playing characteristics and body composition. EHF Scientific Conference2011. 223-227. 2011
- 15) フランスハンドボール協会ホームページより: <http://www.experts-handball.com/> <2016年9月29日現在>
- 16) 第22回ヒロシマ国際ハンドボール大会のホームページより: http://www.handball.jp/games/2016/hiroshima_kokusai/21st_hiroshima.htm
- 17) 金子明友. 教師のための運動学 運動指導の実践理論. Lecture11 運動の修正指導. 137-146. 大修館書店. 1996